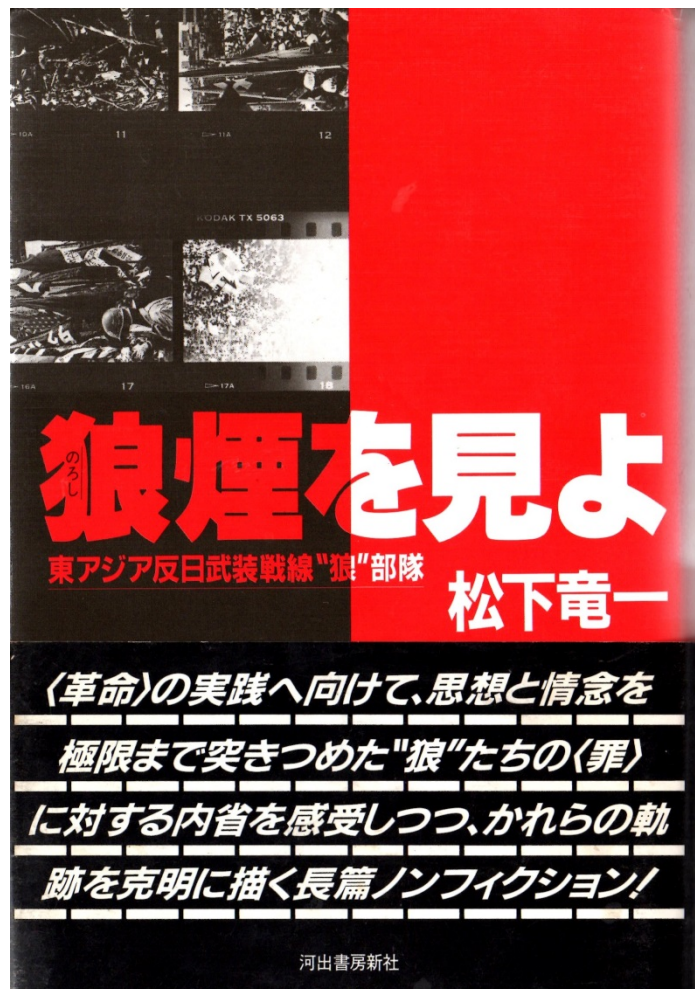


## 「狼煙を見よ」 松下竜一

「東アジア反日武装戦線“狼”部隊」の大道寺将司さんが亡くなったとのニュースを知ったのは5月25日。それで松下竜一の「狼煙を見よ」を再読し、やっと読み終えた。1987年1月の初版本だから30年前で、ほとんど細部は忘れていた。

大学紛争や全共闘運動とは無縁なくらしをしていた豆腐屋の青年・松下竜一が一転して筆で身を立てる道に踏み出し、ひよんなことから大道寺をはじめとする彼らの軌跡を書くことに立ち至る。それは松下の第1作「豆腐屋の四季」が獄中の彼らの間で「ベスト・セラー」になったからだ。そこには、彼らが心を寄せる「人民」の生の姿が詳細に書かれ、それは彼らのイメージを覆すほどの衝撃を持っていた。



しかし、松下は躊躇せざるを得ない。自身の迷い、ひるみを正直に告白しつつ、できれば逃げたいとも書く。そうした自身の揺れを見つめつつ、彼なりの視点で彼らの行動の奥底にあるものに迫っていく作業は、これまたとても重たくて、厳しい。

権力の圧倒的な「暴力」の前に「敗北」「敗退」し、雲散霧消するかのように消えていった「運動の季節」を担った者たち。それを潔しとせず、自己否定路線をつきつめ、「反日」「爆弾闘争」という路線を選び取った彼ら。もちろん、ターゲットは「人民」ではなかった。しかし、現実には真逆だった。そして、「爆弾魔」との非難を浴びるが、「悔恨」と「反省」の中、彼らはさらに突き進んでいく。

だが、権力の監視・追跡は彼らの予想を超えて鋭かった。1975年5月19日、雨の朝、あつという間の一網打尽劇で、囚われの身となり、「死刑囚」となった。赤軍派による「奪還」で幾人かは出獄する。最高裁判決が迫るなか、幾度も筆を止めた松下はようやく書き上げる。

これを読まずして“狼”を語るなかれ、と言いたくなるほどの力作だ。その松下さんに豊中に来ていただいたのは1989年だったろうか。彼は「草の根通信」というミニコミ誌を月イチで発行していたこともあり、「草の根通信とわが青春の軌跡」とったテーマで話していただいたと記憶している。その講演録があったはずだが、探したが見当たらない。それは「天皇代替わりの時に発行した「TEN=NO」パンフに掲載したはずだ。



“狼”部隊で忘れてはならないことは、三菱重工爆破事件(1974年8月30日)の前に、天皇が載った列車を爆破する「虹作戦」があったことだ。これは不首尾におわり、その爆弾が「三菱」に使われ、惨事につながった。天皇をターゲットにすることは、彼らの論理からは必然ともいえるだろう。

そんなことや「共謀罪」など、最近のありようを重ねてみると、まさしく「隔世の感」がする。大切な何かを忘れてしまっているのではないかとも思う。そして、思う。彼らや彼のような人はもう出てこないかもしれないのではと。(ささき)